

## 一つの歯車として

宮原満男

私が武田ミキ先生に始めてお会いしたのは、昭和五十七年で、初等教育学科が設置された翌年にあたります。中枝先生（故人）のあとを受け、児童体育（非常勤）を担当することになりました。二階の学長室に小西（忠）先生と共に、いわゆる面接がありました。いろいろと教育の話、あるいは人生論について、貴方の考えは等話題が進みました。私は当時広大総合科学部にいて、先生の御尊名と崇高な教育論については、同僚、先輩からよく聞いてお

一、大学人としてともに生きて

りましたが、直接お会いし古風で哲人の面影に接し感服しました。その時私は、どんなに小さくても一つの歯車になつてゆこうと思ひました。それが今日まで続いているのです。

去る暑い日、グラウンドで授業をしている時、日よけをした老女が暑いのに草を抜いていると思つていたら、なんと学長の授業視察で、たつたこの間のように思えてなりません。

さらに、開設間もない初教の伝統作りに、将来の教師として責任感の強い、たくましい実践力の養成に、山実習と海実習を提唱したところ、その教育的価値を認められ即実行になつたことも思ひ出の一つになつている。

校舎周辺の防球網の設置にも学長自ら穴掘作業を率先して実行されたとき、恐縮の限りでありました。

また、私自身終生の想い出として、昭和六十年四月十三日、十四日広島市で第一回ワールドカップマラソンが世界六十八か国から三五二名の選手が出場し、開催され世界歴代二位、三位という大記録に世界が湧きました。この大会を陰で支えた二〇〇名のコンパニオンは、広島文教女子大生でした。この年の二月、コンパニオン二〇〇名の派遣依頼を学長にお願ひしたところ、世界の多くの人々と接し、見聞を広め、社会に奉仕する尊さを学ぶ機会であるとして派遣が決まりました。三月一日陸上競技協会の派遣講師による講習会、英会話、マナー講習を受け、いよいよ四月九日から任務開始、十五日までの一週間、空港、宿舎、プレスルーム、輸送、協議場等あらゆる任務につき活躍し、世界陸連をはじめ多くの関係者から感謝されました。そのことは、85 WORLD CUP MARATHON HIROSHIMAという、日英文一四九頁の報告書に記録され、文教生五名の感想文が記載されています。(図書館寄贈)

その一部を紹介すると、「私が担当した仕事は、5 K、10 Kと次々出てくる記録用紙の配布で、先頭の中山選手

とアーメード選手（優勝）が40Kを過ぎる頃から雨が降り始めた。雨中をリレー形式で、記者達に、少し1秒でも速く届けたい一心で走った。……上の役員から私達まで雨の中を大会を成功させるんだと！ 友達が私にかけてくれた「頑張れ！陰のランナー」の言葉は、私だけへのものでなく、この大会を成功させようと、あらゆる人たちへの言葉だったと！。」

またもう一文には「私たちは人文字になって開会式に出席した。世界各国、言葉もちがいがいい、肌の色も異なる人達と一緒に会し、まさに世界平和を感じさせられ感動しました。世界平和がいつまでも続くように！」

あたかも本年は、アジア大会が広島で開催される年にあたり、この書に学生の一文が印象に残りました。参加した二〇〇名の学生がそれぞれ多くのものを得たと思います。

これも武田ミキ学長の高邁な教育思想の一つのあらわれとして強く心に残っています。